

平成 28 年 1 月 21 日

南の風 169

南部ミニバスケットボール連盟
会 長 藤原 敬一

ハイローポストの合わせのタイミングです。

ミニバスや中学生にとって、パスプレイは難しいプレイの1つです。なぜなら**ツーウェイのプレイ**だからです。パッサーとポストマンとのタイミングが合わないと、ミスになったり、パスカットされたりしてしまいます。以下に書くことは、繰り返しの練習が必要です。

ゴールに向かって右側のハイポストと対角のローポストのシュチエーションで進めます。

トップから右ウイングへのパスがされる前にハイポストポジションを取ります。遅れないことです。相手ディフェンダーとのポジション争いに負けずにワイドボディでシールします。対角のローポストはウイングにパスされたと同時にポジションを取ります。(ハイポストマンと一直線上に入るのがベストです。)ウイングからハイポストへのパス入れも、ハイポストからローポストへのパス入れも、パスする時にボールの出所を瞬時に変え、パッシングウィンドーから入れたり、バウンズパスで入れたりします。タイミングがずれた時は、ハイポストは外ヘリロケーションパスするか、ドリブルでポップアウトします。ローポストは元ハイポストがいた場所にフラッシュします。自分がいたポジションのスペースを空けるためです。空いたスペースに逆サイドのウイングが跳び込むこともできます。

紹介したプレイは1つの例ですが、ダブルポストで攻める場合にハイローの固定ポジションだけに拘らず、スペースを空けることも視野に入れてオフェンスを考えることが必要です。

最後に3についての付け足しです。167号でも紹介しましたが**ポストでのターンやステップ**は、ペイントエリアでの1対1の引き出しを多くすると共に、ディフェンスとのコンタクトに慣れるという重要な要素を含んでいます。ぜひ取り組んでみてください。

さてここで、今年の暮れに行われたウインターカップについて書きます。

ご覧になった方も多いと思います。女子決勝の桜花学園VS岐阜女子のゲームです。このゲーム、桜花学園の9冠が懸かっていました。3年間の集大成のゲームでした。一方岐阜女子にとっては、初優勝が懸かる一戦でした。そして今年度この両チームは、公式戦5度目の対戦でした。過去の4戦はすべて桜花学園が勝利しています。特に3冠の内の2つインターハイと国体では、44対40、55対53の僅差のゲームでした。

因縁の対決となったウインターカップ決勝では、岐阜女子が逆転で、54対49のスコアで見事初優勝を果たしました。ゲームの流れを簡単に分析し、感想を加えます。

まず1P~4Pの結果です。岐阜-桜花(4-8、8-16、20-15、22-10)以上です。立ち上がり岐阜の4番村瀬、5番伊藤が桜花に徹底してマークされ、得点することができません。7番のファーターがゴール下を何とか決めました。一方桜花もゲーム開始4分間、得点することができません。その後、桜花8番栗津のシュートが決まり10番ステファニーも続きます。お互い手の内を知り尽くしていることと、決勝戦の緊張感からか思うようにシュートが決まりません。2Pに入り、先に硬さがほぐれたのは桜花でした。4番遠藤、6番矢田、8番栗津、14番山本(1年生)らのシュートが決まり、

ゲームが動きだします。岐阜は中々シュートが決まらず苦戦します。7番ファターのシュートで何とか凌ぎます。2Pを終わった時点で、12対24で桜花リードです。

3Pに入り岐阜に流れがきます。その原因の1つが、6番田中の投入です。開始して岐阜7番ファターがフックシュートを決めます。その後岐阜6番田中が3ポイントを決めます。この**田中のシュートがゲームの流れを大きく変えました**。ここまで岐阜の得点(14点)は、全て7番ファターのシュートでした。田中の3ポイントを契機に岐阜のシュートが決まりだします。そして4番村瀬、5番伊藤、6番田中、7番ファターらが万遍なく得点するようになります。一方桜花も4番遠藤、8番栗津のシュート、14番山本の3ポイントシュートで流れを渡しません。残り時間3分弱のところ、桜花10番のステファニーが4つ目のファウルをします。5番脇(180cm)に交代します。岐阜はすかさず、8番ディヤサン1年生(192cm)を投入します。8番ディヤサンはすぐにゴール下を決めます。3Pを終わった時点で、32対39で桜花リードです。徐々に岐阜女子のシュートが決まり出します。

勝負の4Pです。桜花は10番ステファニーを最初から投入します。4番遠藤のシュートで桜花のリードが9点です。岐阜は7番ファターのシュートで7点に引き戻します。すぐに10番ステファニーが入れ替えし、34対43の9点差とします。両チーム一歩も引きません。残りが8分となったところで岐阜5番の伊藤が3ポイントを決めます。ここから岐阜のオフェンスが全開となります。残り7分で田中の3Pが決まります。3点差です。桜花4番遠藤が入れ返し5点差にします。岐阜4番村瀬の連続シュートで44対45の1点差となります。すかさず桜花8番栗津がシュートを決め3点差です。しかし岐阜7番ファターのゴール下シュートで1点差となります。1分半ほど両チームシュートが決まらず、残り1分44秒で桜花がタイムアウトです。しかしタイムアウト直後、岐阜6番田中の3ポイントが炸裂し、ついに岐阜女子が49対47と逆転します。桜花は10番ステファニーがペイントエリアのシュートを入れ同点とします。直後、岐阜村瀬のシュートに対して桜花山本がファウルをします。村瀬がバスカンも決め52対49になります。桜花は必死にシュートにいきますが決まらず、時間が無くなります。残り30秒で岐阜9番藤田のシュートが決まります。残り20秒で岐阜女子ベンチは、念には念を入れてタイムアウトを取ります。そしてついに、激闘の勝負に決着がつきました。54対49で岐阜女子がウインターカップ初優勝を果たしました。

ここで次の3点について分析することにします。

- ①岐阜女子は前半12点しか取れなかったのに、後半だけで42点と爆発したのはなぜか
- ②岐阜女子7番のファターと桜花10番ステファニーの対決から見えるものは何か
- ③両チームのオフェンス、ディフェンスの考え方

まず①ですが、端的に言えば**後半桜花の足が止まった**ということです。前半桜花は、岐阜女子の4番、5番、9番のミドル及び3ポイントシュートを徹底して抑え込みました。過去何回か対戦しているため、岐阜女子の得点パターンをしっかり封じていました。しかし、7番のファターだけは封じることができませんでした。前半の12点はすべてファターの得点でした。岐阜女子のベンチ、選手は相当ストレスがたまっていたと思います。後半に入りターニングポイントになったのが、スタートから登場した岐阜女子の6番田中の3ポイントでした。田中選手は前半出場しませんでした。安江コーチの作戦なのか、体調面なのかはわかりませんが、満を持しての起用でした。この3ポイントで岐阜女子の4番村瀬、5番伊藤にスイッチが入りました。シュートを『踏ん切りよく打つ』ことができるようになりました。一方桜花は、**岐阜女子の中から外への合わせに対応が遅れ出します**。次号にします。